

I 研究の経過と概要

1. はじめに

昭和54年に養護学校義務制が実施されて以来、今年度でちょうど20年になる。前半の10年間は自閉症をはじめ障害の重い子等が多数入学するようになり、いわゆる重度化・多様化の傾向が強まった時期であった。それに対応して全国に施設・設備が充実した新しい養護学校が設置され、養護・訓練の指導や生活単元学習の研究など、それぞれの学校の特色を活かした取り組みが進められていった。また、時同じくして、ノーマライゼーションの理念が広まり、「障害をもった人々に本人参加と自己決定の機会を保障し、障害の実態に応じて自らの生活を自ら決定していけるようにすべき」という考えが浸透してきた。こうしたことで、養護学校における教育方針は見直しを迫られることになる。これまで「社会適応・社会自立に必要な知識を教え、技能を習得させること」を目標として指導が行われていたが、子どもたちを社会や学校の枠に合わせるのではなく、「一人一人を大切に、その子らしい自己実現をめざす」という方向で目標を考えるようになったのである。

後半の10年は時代も平成に変わり、学習指導要領も大幅に改訂され、この中の新しい学力観において「自己教育力の育成」「個性の尊重」「生きる力・意欲の重視」などが強調された。これらは今までの「詰め込み主義・知育偏重教育」の反省に基づき導きだされてきたものであるが、知的障害児の教育においても当てはまるものである。「生活を教える」「人間を教える」という根源的な教育の必要性が叫ばれている現在、まさにそうした教育を進めているのが養護学校であるといえよう。また、段階的に学校週五日制が実施され、家庭や地域でのゆとりある暮らしの中で生涯を通じて生きがいを見つけることの必要性も認識された。

このように、社会の動向や教育の施策などによって障害児教育において求められている内容も変わってきている。21世紀を2年後に控えた今、私たちがめざそうとしている教育を具体化し実践しながら、障害をもった子どもたちの「豊かな心と生きる力」を育ていけるよう、たゆまぬ研鑽を続けていかなければならない。

2. テーマについて

(1) 研究の経緯と主題の設定

本校は昭和62年にノーマライゼーションの理念や児童生徒の重度化・多様化に対応する教育内容として「集団学習」を教科・領域を合わせた指導に位置づけ、4回目の教育課程の改訂を行った。「集団学習」とは縦割りで行われる全校的活動や学部単位で行われる集会的活動のことで、集団の力が情緒の安定や意欲の発現に効果的であるとの研究成果を得て、本校の教育内容に加えたものである。そして翌年からは「発達と障害に応じた指導」をテーマに、子ども一人一人を見つめ、その多様なニーズに応えるための実践研究に取り組んだ。これは、授業づくり、絵本の読みきかせ、パソコン、コミュニケーション、性の指導など教師一人一人が教育実践の中で抱えている問題意識や課題を取り上げプロジェクトを組んで

グループ別に行った研究である。このユニークな研究体制はそれぞれの教師が専門性や得意の分野を活かして取り組んだこともあり、深まりのある研究が蓄積され5年間継続された。また子どもたちの学習に対する意欲も高まり、自らの気づきによって課題解決していく姿もみられるようになった。そして平成5年には創立30周年を迎えこの年を節目としてまた新たな第一歩を踏み出したわけである。

この年、創立記念事業などの準備と同時に、次のテーマへの模索も始まっており全体研究会や各部の話し合いも数多く行われた。この中で子どもたちの学校生活について「いろいろな状況に対応することが難しい子が多い」「目的的な行動がとれない」「教師とはかかわれても子ども同士のかかわり合いが少ない」などの問題が出された。

折しもこの頃はQ. O. L (Quality of life) やバリアフリーなどの言葉がマスコミに盛んに取り入れられて社会福祉に対する関心が高まってきており、障害をもった人々も私たちと変わらない生活をし充実した毎日が送れるような社会の実現が望まれるようになったところである。また平成元年に改訂された学習指導要領に沿って各地の障害児学校で「生きる力」をめざした教育が進められるようになったところでもある。こうした今後の障害児教育を方向づける流れは、まさに私たちが取り組もうとしている教育と合致するものであり、本校の子どもたちの実態の現状を思うと「子どもたちの生活をもっと豊かで充実したものにしたい」という願いは一層強いものとなった。

そこで「豊かな心と生活をめざして」というテーマを設定し、平成6年度より各学部のテーマにしたがって、それぞれ実践研究を始めた。

(2) 「豊かな心と生活をめざす」ための3つの視点

「豊かな心と生活をめざす」教育を推進していくためには、どのような教育をしていけばよいか明らかにする必要がある。その視点として私たちは次の3点を挙げ研究を進めることにした。

①人とのかかわり合いの中で生きる

人は社会的存在であり人とのかかわり合いなしでは生きてはいけない。多くの人々とかかわり、共に喜び、共に悲しむといった感動を体験することが「豊かさ」につながり、それが人間として豊かに生きる基本であると考えた。そこで、先生や友達とかかわる場面の設定を工夫し、他者とのかかわりをもとに自分の気持ちを決定したり、まわりの状況との調和を考えながら生活したりできるような力を身につけていけるようにした。

②身近なもの・自然・社会とのかかわりの中で生きる

人とのかかわりだけでなく、さまざまな場面で子どもたちは刺激を受け、環境に働きかけることによって自らの行動を決定し自分の楽しみを見つけていく。そうした経験を重ね、生きた知識を得ることによって、自分の行動に自信を持ち、より主体的な活動へとつながっていく。こうした仮定のもと、学校の中だけでなく社会や自然の中へ積極的に出かけて興味あるものに十分ふれる体験を重視した。

③自分らしさを発揮して生きる

子供たちはものや人とのかかわりを通して自我を形づくっていく。その自我は個性や自分らしさを発揮する原動力になるものであり そうしたときは心の中がとても充実しているときといえる。この個性や自分らしさは自己選択や自己決定につながる大きな力となる。

そこで 子どもたちの気持ちを尊重し自主的・創造的に生活することができるよう なるべく教師の干渉を少なくし自由に活動できる場を保障した。

このように 子どもたちが教師の支援によってまわりの環境つまり身近な人・もの・自然・社会に進んではたらきかけることによって自我を発達させ 適切な経験を積み重ねることで「豊かな心と生活」は形づくられていくと考えた。それを構造図として表したのが次の図である。

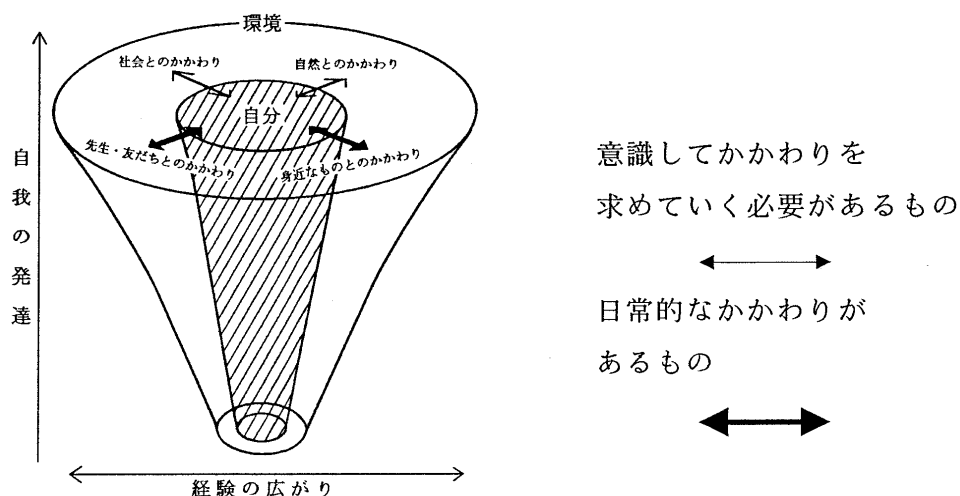


図 I - 1 豊かな心と生活の構造図

この構造図をもとに 本校では 豊かさを次のように捉えた。

豊かさとは さまざまな場面でものや人とかかわり合うとともに自分らしさを発揮しながら のびのびと生きること

3. これまでの取り組みの概要

各部の子どもたちの「豊かさ」について考慮しながら研究を進めていく中で 学部の実情に応じたユニークな活動が展開された。過去3年間の実践研究の内容は次の通りである。

(1) 小学部

初めは 歌 リズム ゲーム 造形活動を行う「部朝の会」を実践の場とした。活動に季節や色に関するものを取り入れ 季節感を味わい その季節に応じた生活に気づかせたり 友達とのかかわりの中で活動そのものを楽しむことをねらいとした。指導の結果 言葉の響きや素材に興味をもって学習に集中したり 授業で行った遊びを休み時間にやって

みたりするなど「意欲」の面で子どもの変容がみられた。

学部集会である「部朝の会」の時間を「ランランタイム」と改め 単に歌やお話の時間ではなく 子ども同士のかかわりや社会性を養うことを中心にした内容を考えた。この取り組みにより 学級でのかかわりに加え 低学年や高学年の子が互いに入り交じって遊ぶ様子がみられるようになり 子ども同士のかかわり合いが広がった。また 縦割り活動により所属意識や仲間意識を深めることができ 高学年のなかにはリーダーとしての自覚がめばえた。

(2) 中学部

心身の開放のためや校外学習のような散歩にとどまらず 身近な自然や社会を実際に体験し 子どもなりの発見や子ども同士のやりとりなどを大切にした「散歩学習」の取り組みを考えた。つまり 将来子どもたちが一人で散歩できるようになることをめざすのではなく 発達を促すための一手段として考え研究をすすめた。また 散歩だけでなく学校生活全般についても見直し 子ども同士の「つながり合い」を育てる学習活動についても考察することにした。「ともだち再発見」というテーマの活動では「連れていかれる散歩」から「連れていく散歩」へと内容も変化し 自分たちで散歩をつくる楽しみを子どもたちは見出しはじめ 自主的な活動につながってきている。また クラスの「作ってあそぶ活動」でも教師が遊びの渦を作り しだいに子どもたちの手に渡す経過を踏み 発達レベルや要求にその場が合ったとき 子どもは予想以上に夢中になって取り組みその過程で互いに集い合っつながりが広がっていくことを経験した。

(3) 高等部

MT (マルチパーパスタイム) という学習が高等部の時間割りに取り入れられている。これは文字通り多目的に使える時間のことであるが、その中心的内容として「挑戦学習」がある。これは皮むき・けんだま・洗濯・漢字の読みなど教師が生徒の実態を考慮して いくつかの課題を提示し その中から生徒がしてみたいと思ったものを練習しその成果を発表するものである。さらに発表会では審査があり不合格のときは再度練習して審査に挑戦しなければならない。それだけに合格の喜びは大きくこれが生徒の自信につながっていく。この挑戦学習のあと さまざまな面で生徒の成長がみられるようになった。

「挑戦学習」だけでは卒業後の豊かな生活のための指導としては不十分と考え さらに「ほんもの学習」と「レクリエーション学習」を考えた。「ほんもの学習」は学校生活ではあまり経験させることができない活動を積極的に取り入れ 公共施設など実際の場所へ行って活動するものである。「レクリエーション学習」は学部単位の多くの人数で活動することも大切と考え ウォークベースボール エアロビクス フォークダンスなどを行なった。

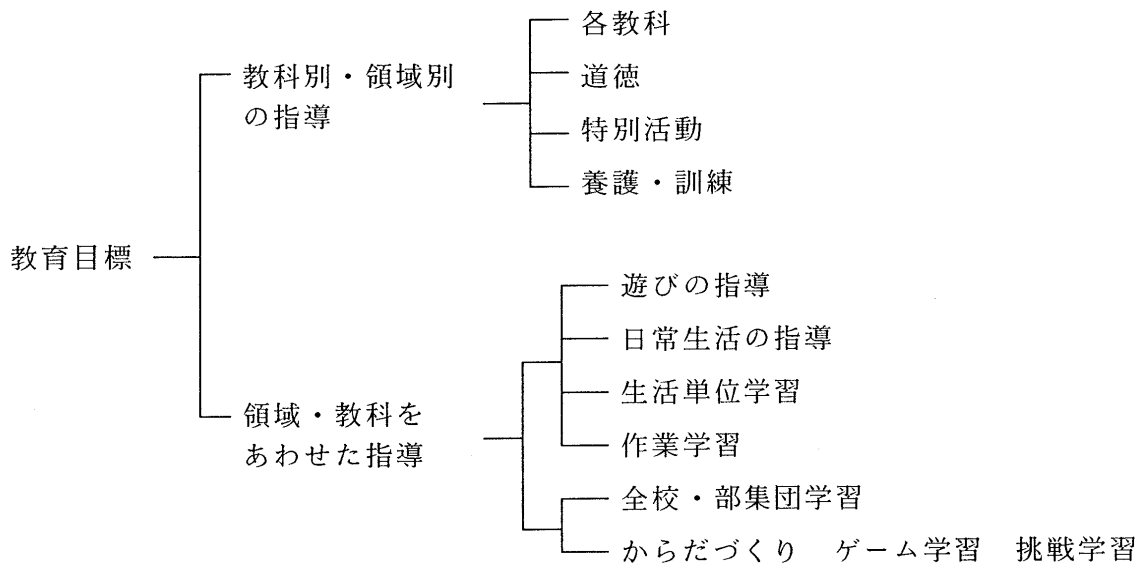
このように 挑戦学習 ほんもの学習 レクリエーション学習が相互に関係をもって機能することで 生徒たちの心と生活が豊かになると考えられ これらの効果的な指導方法について研究を行った。

4. 本校教育課程と「豊かな心と生活」の関連

(1) 現行教育課程の構造

1988年に編成されたこの教育課程は 教科・領域を合わせた指導に集団学習が位置づけられている点に特色がある。これは自閉的な傾向の強い子の増加など 子どもたちの重度化・多様化に対応するため考え出された指導形態である。全校あるいは学部単位で行われ障害の重い子も軽い子も また年齢の大きい子も小さい子も一緒になってリトミックやゲームを行うもので 多くの子が集団による学習の中で落ち着いて行動し 他の子の様子を見て見通しをもったり自発的に取り組んだりすることが 研究の成果としてわかってきた。それでこうした活動を本校の大切な取り組みとして教育課程のなかに位置づけたのである。集団学習には 全校的なものと学部単位のものがあり 全校的なものには縦割りのグループが編成されている。全校の縦割り集団で活動を行っているところは数少なく それも全校活動が週2回（月曜日は集会・木曜日はゲーム）学部別による活動が週2回あることからこの活動に大きな比重がおかれていることが分かる。そして学部別では部の朝の会やゲーム学習 からだづくり 挑戦学習などさまざまな活動が「教科・領域を合わせた指導」として行われている。これらが教育課程の中でどのように位置づけられているか次にその構造図を示す。

図 I - 2 教育課程構造図



(2) 現行教育課程と「豊かな心と生活」

現行教育課程の教育目標は「一人一人の全面的発達をうながし その子らしく精一杯生きる力を育てる」である。本校の研究のテーマである「豊かな心と生活をめざして」はこの目標に合致するものといえる。したがって この教育課程の基本的考え方には 本テーマにつながる内容がたくさん含まれている。次に挙げるのはその中からの抜粋である。

〈小学部〉

- ・ さまざまな生活体験を通して豊かな心を育てる
- ・ 集団への参加をとおして 社会性を育てる

〈中学部〉

- ・ 友達とのかかわりを豊かにするような内容を取り入れる
- ・ 生活経験を広げる内容を取り入れ 生活力を高め広げる

〈高等部〉

- ・ 職業教育に偏ることなく 基本的教養を身につけ豊かな人間性を築き上げる
- ・ 個性を尊重し 能動的に活動できる場を保障する

このように 本校では早くから「豊かな心をもち豊かな生活をする事」の必要性を訴え その結果として小学部・中学部の「集団学習」高等部の「挑戦学習」が考えだされたのである。このことから本校において本テーマが設定され さらに今年度教育課程の再編に向けて深めていくことになったのも当然のことと考える。

5. 今年度の研究について

(1) サブテーマの設定

現行の教育課程が編成されて以来 私たちは子どもの個性や能力に応じて様々な角度や立場からその発達の可能性を探ってきた。そして「豊かな心と生活をめざした教育」を進めるため これまで高等部で行われていた「挑戦学習」に加え 小学部では「ランランタイム」中学部では「散歩学習」高等部では「ほんもの学習」が考えだされた。これらの指導形態は 基本的にはほんものに触れる実体験や集団で同じ目的に向かって取り組むことを通して 生活を営んでいくときに必要なことを学んだり その子なりの個性を表現したりできる場を提供するものである。3年間これらの取り組みの研究と実践を積み重ねた結果子どもたちがのびのびと楽しく学校生活を過ごし かつ自ら考え行動する態度も身につけていき自信に満ちた生活ができるようになっていった。

このように研究としては大変意義のあるものであったが こうした取り組みを進めていくうち 他の時間を削って行うことがあったり これらの新しい内容が教育課程の枠に入りきらないため その位置づけがはっきりしないままという教育課程上の不都合さが問題となってきた。どちらかといえば「生活単元学習」に似ているが微妙に異なっている点もあり 実際これまでの研究会でも論議がなされてきた。現行の教育課程の編成後 10年が経過しているので 新しく編成し直すことも考えていかねばならない。また3年後には完全に学校週五日制が実施されることもあり 一層内容の精選と整理が必要となってくる。さらに 増える余暇の過ごし方を子どもに教えることも今後の豊かな生活や本人参加 自己実現とも大きく関連してくるものと思われる。

したがって 今年度はこれまでの研究成果を踏まえながら「教育課程再編成に向けた実践研究」をサブテーマとして「豊かな心と生活をめざした教育の在り方」について研究を一層推し進めていくことにした。

(2) 研究の目的

教育課程の再編成を意識しながら「豊かな心と生活」の研究を進めていくわけであるが具体的には子どもたちの将来を見据えた教育内容の選定と教育方法の工夫について深めていくこととし 次の事柄を研究の重点とする

- ・ 各部の特色や児童生徒の実態を踏まえ それに応じて「豊かな心と生活」が反映された教育実践を行う
- ・ 実践研究の対象となる指導内容の教育課程上の位置づけを明確にして 年間計画や週時表に組み込んでいく
- ・ 自発性 自己選択 自己決定を視点にしながら指導内容の検討を行っていく

(3) 研究の方法

①研究体制

本校の研究組織として 研究部会 全体研究会 部研究会の三つがある。研究部会は研究部員が集まり研究計画や研究方針などの立案を行う。全体研究会は小学部・中学部・高等部の全員が集まり案の検討や決議を行う。部研究会では学部の研究を進めたり 全体研究会で議件が決定しなかった場合など部に下ろして再度討議が行われる場とする。

本研究については 教育課程を念頭に入れながらの研究なので 基本的には学部の研究が主になり 各部に所属している研究部員が中心となって具体的な研究の推進に努める。

しかし 研究全体に関することについては 研究部会が提出した案を全体研究会で検討したり 部の研究会の場で練ったりして 最終的には再度全体研究会で決定する。

研究体制の構造については次の通りである。

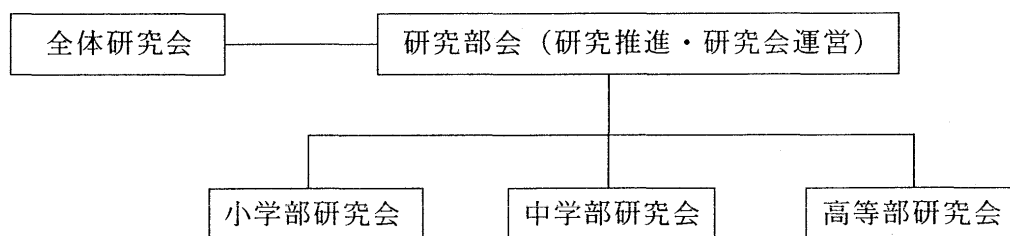


図 I - 3 研究体制の構造

②研究方法

まず 各部で現在の実践内容について見直しを行い 問題点やさらに新しく取り組まな

ければならないことを話し合った。そこから各部のテーマを決定し今年度の実践に取り組んだ。各部においては クラス別あるいはグループ別の集団編成で子どもの活動の様子をビデオで記録したり 考察した結果をまとめたりしながら それらの実践が子どもの豊かな姿に迫るものであるか分析を加えた。

(4) 各部の研究の内容

各部では「豊かな心と生活」をめざしてこれまで取り組んできた実践内容やさらに発展させてきた取り組みについて 他の教育内容との関連を図りながら その活動の意義やねらいを明確にしていくとともに どのように教育課程の枠の中に位置づけていくか検討することにする。各部の研究の内容は次の通りである。

①小学部

「豊かな心と生活」についてこれまで研究を進め、互いにかかわり合うことで豊かな心が育まれると仮定し「ランランタイム」などでの活動を通して実践を重ねてきた。その結果、「豊かな心」については集団の中で友達・先生とのかかわりの面で成果がみられ、友達とふざけ合う姿や小さい子を思いやる心などが育った。しかし「豊かな生活」という視点で個に返って見てみると 姿勢や動きに関する事で問題となることが数多く指摘された。高学年では、背筋を伸ばした姿勢が維持できずすぐ肘をついてしまう 絨毯に寝そべってなかなか遊びが広がらない 低学年ではトイレでしゃがめなかったり 姿勢や歩行がぎこちなかったりといった様子がみられ こうした状況が子どもたちの生活を狭め より豊かな生活を営むことにつながっていかないのではないかという問題が浮き彫りになってきたのである。

そこで小学部においては「豊かな生活」の基盤となる「健康的な生活づくり」が大切であると考え そのために「からだづくり」を体育 養護・訓練 生活などの教育活動を通して 見直すことにした。もちろんこれまで子どもたちの感性を育て友達を意識し合うことを目標としている「ランランタイム」は今までどおりに続けていくこととする。

②中学部

小学部のときは日常生活に必要な動きづくりや体づくりが中心に指導され 高等部では卒業して社会へでるまでの準備段階としての取り組みが行われている。中学部では、子どもたちの能力差がいっそう顕著になるとともにその個性もさらに強くなるので 中学部全体としてのねらいを明確にして個々に対しても将来に向けどんな力をつけるか明確にすることが問題になってくる。本校では中学生として身につけるべき要素として「友だちとつながる力」に目を向け その指導の在り方を探ってきた。今年度は、その「つながる力」をもとにしてさらに子供同士が主体的に活動し、その子その子に合った教育の実現をめざし取り組むことにした。そのために 自由に自分の好きな活動ができるような時間を設定し そのなかで子供たちがどのような行動をするか見ていくことにした。これは その子らしさを発揮し自己選択・自己決定するための良い機会となるとともに一人一人に応じた教育の模索でもある。こうした時間の設定が子供の生きる力につながっていくとなれば教育課程に積極的に取り入れていくべきと考える。

③高等部

これまで、卒業後の生活に息づく学習活動をめざして実践を重ねてきたが、いま一度高等部の教育課程について見直しを行ったところ、高等部では欠かせなくなっている活動であるMTの位置づけがはっきりしていないことが話題にでた。1988年編成の本校教育課程をみるとMTの中の「挑戦学習」は、教科・領域を合わせた指導の中に位置づけられている。「挑戦学習」は、教師が提示した課題の中で子ども自身が練習すればできそうなものを選んで日々それに取り組んでいく、まさに挑戦していく学習であるが、その内容は教科に関することが意外に多いことがわかった。また、同じ課題を選んで何人かのグループをつくっていることから、教科学習として行っているグループ学習と関連させることができることに気づいた。そこで、今年度から「挑戦学習」を教科学習として見なし取り組んでいくことにした。

(河 合 利 秋)